

93 子宮体部内膜癌と内性子宮内膜症における病巣周囲間質反応の比較

大阪医科大学産婦人科学教室

庄田博至, 佐野 隆, 岡本吉明, 植木 実, 杉本 修

〔目的〕宿主における腫瘍増殖と間質の応答に関する研究は重要である。今回、悪性である体部内膜癌（体癌）と良性である内性子宮内膜症（内膜症）を材料として、それらの病巣とその周囲間質反応を検索・比較し、局所における防衛反応の相違を考察した。〔方法〕体癌30例、内膜症38例、体癌転移リンパ節5例（延べ12個）とリンパ節内膜症7例（延べ10個）について、組織学的に細胞性・線維性間質反応を検索し、体部筋層では酸性ムコ多糖を組織酵素法、collagen(hydroxyproline)量をProckop法、collagenase活性をLawrence法で測定した。〔成績〕①病巣の進展形成は、両者は主に筋組織間隙への連続性侵入による点では類似した。体癌病巣では内膜間質細胞はみられず、周囲筋組織への破壊性浸潤と脈管内侵襲が著明であるが、内膜症病巣では内膜間質細胞が豊富で、これらの浸潤所見は乏しかった。これらの相違はリンパ節内病巣でも類似した。②細胞性間質反応は、体癌では炎症性浸潤細胞が多く出現し、内膜症では少なかった。③線維性間質反応は、体癌では細網・膠原線維はともに比較的豊富であり、内膜症では膠原線維は乏しかった。④酸性ムコ多糖は、体癌に豊富で内膜症に乏しかった。⑤collagen量およびcollagenase活性は、両疾患ともに健常部、境界部、病巣部の順にhydroxyproline量が多く、collagenase活性は逆の相関を示した。境界部ではこれら両値は体癌が内膜症より高かった。〔結論〕体癌では病巣に破壊性浸潤性格と、著しい間質反応が認められるが、内膜症ではこれらの所見が乏しかった。このことは、病巣の内膜上皮細胞の生物学的性格差が生体の防衛機構作動に差を生じさせ、間質反応に明らかな相違をもたらすと考えられた。

94 子宮内膜癌に於けるO型血液型物質（H抗原）の特異的表現について

兵庫医大

小笠原利忠, 辻 芳之, 西浦治彦, 竹村 正, 磯島晋三

〔目的〕近年 CA19-9など monoclonal 抗体により認識される腫瘍関連抗原の研究が進められ、血液型物質が腫瘍関連抗原と密接に関係していることが明らかにされて来た。一方最も代表的なA・B・O血液型抗原（A・B・H抗原）についても、癌化に伴い動的に変化する事が以前より知られている。しかし従来の抗A抗B抗体は、ヒト同種抗体を用いており、又H抗原については同種抗原が得られず、抗体の代りにH特異的 lectin であるUlex europeus lection を用いた方法であった。これらの方法は力価と特異性に問題があり、特にH抗原の癌化に伴う変化に関して明確な解答は得られなかった。しかし最近A・B・H monoclonal 抗体が開発され、H抗原についても信頼性が非常に高まって来た。今回我々は、正常組織と癌組織との比較検討が容易に出来る子宮内膜に着目し、子宮内膜癌に関してA・B・H抗原の表現様式を検討した。〔方法〕手術により得られた正常子宮内膜30例、子宮内膜癌40例について、患者のA・B・H血液型を参照しつつ、DAKO社のA・B・H monoclonal 抗体によるABC法にて免疫組織学的検索を行なった。〔成績〕正常内膜ではA・B・H抗原はほとんど表現されて居なかったが、内膜癌では、一部のA、B型の症例でその血液型に一致したA、B抗原が表現されて居たが、他方、患者の血液型に関係なくH抗原の癌病巣部に於ける特異的な表現が、大部分の患者に認められた。〔結論〕本来正常の子宮内膜には、A・B・Hいずれの抗原もほとんど表現されて居ないが、内膜癌では、患者の血液型に関係なくO型（H型）抗原が表現されており、少なくとも子宮内膜癌に於ては、H抗原が腫瘍関連抗原になり得る事を証明した。